

茶巾盥ト云アリ、カ子ノ物也、則茶巾ヲ可洗、

釜居ト云アリ、釜ヲ載置テ洗フ、寸法別ニ記アリ、片口アリ、大中小各形アリ、

〔茶傳集十〕一水屋雜巾、寸法定りなし、淺黄、か紺木綿貳尺計ニ切テ水屋に置ベシ、○中略

一水屋柄杓 杉杓目

差渡三寸八分半 深サ貳寸壹分半 木厚一分ニヨハン 底板貳分 柄ノ長サ甲際迄七寸貳

分、柄甲際ノ巾三分五リ、同厚貳分、柄ノ元巾四分、同厚三分、木口ハ六分下リ、柄通シノ穴有之、

先キノ處は、輪ノ下ハ七分上リテ、柄先五厘計出して引通有之、ハ子ハ三寸計にして吉、

一水こし 杉杓目

右同寸にして底なし、布輪巾三分半、厚壹分也、

一水屋手桶

寸法なし、大小ノ五ツたがの桶、又は燒物ノ瓶を用、○中略

一茶巾たらひ 杉杓目

面桶のごとくにして、差渡七寸五分、深サ三寸三分、板の厚サ貳分半、底三分ニよわし、足無曲物也、

〔千家茶事不白齋聞書〕茶巾洗之事

一杉曲物形也 眞鍮たらひ

〔和漢茶誌三〕筥 俗云炭斗 圓曰筥

字書曰、圓如箱篋、古盛饗餼之米、致於賓館之器也、按茶經曰、以竹織之、高一尺二寸、徑一尺、或用藤、或用蒨、如筥形、織之、六出圓眼、其底蓋若利篋、又方曰篋、適有蓋其口者、蓋者不足爲風雅、今時不用、至宋元明、嗜茶之好士等異其形、或高一尺、徑九寸、或八寸、七寸、大者徑一尺一二寸、高三寸、此外大小各有異同、

烏府 炭斗也 見茶譜

炭斗